

発達障がい者就業支援コーディネーター事業効果を測るための聞き取り等の実施状況
(平成25年12月～1月)

1 目的

平成20年度から実施している本事業において、支援による就職者数は数値として成果が明確ではあるものの、支援方法についてはこれまで検証は行っていなかった。このため、平成26年度に今後の支援方法等の向上を目的に、関係者からアンケートを行う予定であるが、その前段にアンケート項目を検討するため、今回、聞き取り調査を実施する。

2 調査対象

- (1) 相談者（当事者） 2名
- (2) 雇用企業担当者 1名（ただし、在職者に関する相談支援）
- (3) 連携先機関 3名（ハローワーク、障害者職業センター、就業・生活支援センター）
- (4) 相談支援機関 1名（相談支援事業所）

3 聞き取り概要

(1) 相談者（当事者）2名

Q 「相談前後の変化（困りごと、自身の気持ち、家族や周囲の反応、生活リズムなど）」

A

- ・月1回の相談が「外に出る・動くきっかけ」になっている。（ひきこもらない。）
- ・相談により、色々な人との関わりが持てるようになった。（以前は主治医のみ）
- ・通所施設や主治医への確認事項などを事前に就業支援コーディネーターへ話し、伝え方を一緒に考えてもらうことで、自信を持って通所施設や主治医に話せる。
- ・一緒に考えてくれる人、助けてもらえる存在があるという安心感がある。
- ・相談しても直ぐには就職出来ず、相談しない時期が1年近くあったが、「自分はこのままでいいのだろうか…」と思った時に、もう一度相談することができた。

(2) 雇用企業担当者 1名（※在職者に関する相談支援）

※社内で、困った言動やトラブルのある職員への病院受診や診断へのつなぎ方について相談を受け、診断後は、企業には本人への対応方法について助言し、本人には同行受診を行うとともに気持ちの整理などを助言。

Q どんな点が役に立ったか、役に立たなかったか。

A

- ・障がいや診断について、全くわからなかったが、情報が得られ、診断につながった。
- ・まだ問題行動はあるが、定期受診や支援機関との関わりを持つことで、本人も少しずつ成長してきている。
- ・職場訪問により、同僚や上司に「発達障がいについて」「本人の特性」「本人との付き合い方」を説明してくれた事は、周囲の理解につながった。
- ・職場内での本人の人間関係や配置転換に関する事など、職場以外でも相談できる場所ができた。

(3) 連携先機関 3名

- Q ① コーディネーター事業が果たしている役割
 ② コーディネーター事業が有効だと感じる点
 ③ デメリット、要望

A

- ① コーディネーター事業が果たしている役割について
- ・各機関の役割を本人に説明し、本人を中心としたつながりを作ることで、本人が社会資源や新たな支援を利用しやすくなる。
 - ・どこかの機関に振って終わりという支援をどの機関もしないようつなぎとめている。
 - ・本人との関係作りや見通しをつけ次の機関に繋げてくれるので、円滑な就労支援ができる。
 - ・本人とコーディネーターとの信頼関係があるので、支援につまずいた時に立て直しのチャンスが作りやすい。
- ② コーディネーター事業が有効だと感じる点について
- ・本人が様々な訴えを上手く伝えられない等、社会資源等とつながりが持ちにくいケースに対し、コーディネーターが訴えを聞き、整理して他機関との間に立つことで、当該機関が本来すべき支援がしやすくなる。
 - ・7か所の就業・生活支援センター、5か所のハローワークがあり、複数の窓口で相談される当事者もおられ、圏域跨ぎでの情報共有が必要な際、コーディネーターは市内全域を担当するので情報のまとめがしやすい。
 - ・障がい者就業・生活支援センターは就労支援機関や地域の支援機関と関係が取れており、その組織内に在籍するコーディネーターは相談者をスムーズに就労支援にのせることができる。
 - ・相談者に関する連携の場合、その対応や障がい特性、本人の課題の伝え方、共有の方法などに関しスムーズにやりとりが進む。
 - ・コーディネーターが、受診や日常生活面において、既に本人をとりまく機関とつながりを作っており、日常生活面でのサポート体制があるので、就労支援がスムーズに進む。
- ③ デメリット、要望
- ・発達障がい者の特性や傾向（攻撃性、粘着性、被害的思考など）、支援に要する時間を考えるとコーディネーターの負担が大きく、専門性が高いがゆえに多忙を極めている様子。

(4) 相談支援機関 1名（相談支援事業所）

Q デメリット、要望など

A

- ・コーディネーター事業の活用の仕方が見えにくい。
- ・発達障がい者へのケースワークは、情報の整理や優先順位を付けることに手間暇がかかり、また、その部分を適切に行うことが支援のポイントやタイミングを大きく左右する。コーディネーターには、ケース全体を把握し情報の整理や調整を行うことでスムーズな支援につなげる役割を担うことが求められている。